

森林分野の専門辞典に見るレジャー・レクリエーション関連用語の変遷

田中伸彦(独)森林総合研究所)

キーワード：森林レクリエーション、専門辞典、用語の歴史の変遷

1. 研究の背景・目的

本研究は、わが国の森林分野で「レクリエーション(以下レクと表記)」が、どのように位置づけられてきたのかを明らかにする目的の一環として行われた。

わが国は、国土の約3分の2が森林に覆われる国であるため、レク活動の場として森林は重要な役割を果たしてきた。わが国の森林レクに関する研究や施策を振り返ると、明治期に近代的森林管理が開始されて以降、大正期に一時活性化したものの、第二次世界大戦で中断し、戦後は1960年代あたりから再興したという歴史がある(田中2007-1, 田中2008)。言い換えれば、現在行われている森林のレク管理は1960年代あたりを機に連綿と続けられているといえる。しかし、そのように歴史を重ねているものの、森林レクという言葉の定義は、現在においてもなお、明確で固定的なコンセンサスを得ているとは言い難い。むしろ、時代の変遷に従って森林レクという言葉が指す意味は、絶えず変化し続けているというほうが適切な認識であると言えよう。

この様な状況を鑑みて、田中(2007-2)は、1961年から2001年までに発刊された5冊の森林分野の専門辞典におけるレクに関する解釈の記述を比較を試みた。その結果、レクという言葉の概念は、年を経るにつれて広がりを見せ、多様化している事実を明らかにした。つまり、レクという言葉の解釈は、当初森林との密接度が深い活動に限られていたのであるが、近年は純粋な野外活動とは必ずしもいえない活動まで対象を広げる傾向にあることが明らかになった。そのため今後は、森林や林業に直接関係する野外活動はもちろんのこと、森林との直接的関わりが高いとはいえないレク活動も積極的に範疇に入れ、最適な森林管理を探求する必要があるとの結論を得た。

本研究は、上記の結論を受けた上で、専門辞典を用いて更なる考察を行うことにした。つまり、田中(2007-2)ではレクという直接用語の定義の変遷だけを検討の俎上に乗せて考察を進めたのであるが、今回はそれを「辞典に掲載されているレジャー・レク関連用語全般」の変遷に拡張し、より深い考察を試みた。

なお、一般に言葉を定義する方法には、「この言葉はこの意味で使うべきという規範的内容を明らかにする方法」である「規範的定義」と、「その言葉が実際にどのような意味で使われているのかという実態を明らかにする方法」である「事実的定義」がある。本研究では後者の「事実的定義」に着目して考察を行っていることを付記しておく。

表-1 これまでにわが国で発刊された森林・林業関係の専門辞典一覧(発行年順)

事典名	発行年	編著者	出版元	ページ数
1 林業百科事典	1961	社団法人 日本林業技術協会	丸善株式会社	1086
2 新版 林業百科事典	1971	社団法人 日本林業技術協会	丸善株式会社	1168
3 森林・林業・木材辞典	1994	林野庁編集協力、森林・林業・木材辞典編集委員会編	(株)日本林業調査会	375
4 森林の百科事典	1996	太田猛彦・北村昌美・熊崎実・鈴木和夫・須藤彰司・只木良也・藤森隆郎	丸善株式会社	826
5 森林・林業百科事典	2001	社団法人 日本林業技術協会	丸善株式会社	1236
6 森林の百科	2003	井上真・桜井尚武・鈴木和夫・高田文一郎・中静透	朝倉書店	739
7 現代林業用語辞典	2007	林業Wikiプロジェクト編	(株)日本林業調査会	184

* ハッチングをかけたものは今回の考察対象とした辞典である。

2. 方法

表-1に示したとおり、わが国では森林学に係る専門辞典が7冊発行されている。本研究では考察に一貫性を持たせるために、そのうちから編著者・出版元が同一で、かつページ数も比較的統一がとれており、さらに1961年から2001年の40年間にわたる変遷を追うことができる「林業百科事典(日本林業技術協会(1961年版))」、「新版林業百科事典(日本林業技術協会(1971年版))」、「森林・林業百科事典(日本林業技術協会(2001年版))」の3冊に着目した考察を行うことにした。

考察の方法としては、まず①上記3冊の編集方針を整理した上で、次に②各辞典から森林レクに関連する用語を抽出・類型化して比較・考察を行うという手順を踏んだ。なお本研究では、「森林レクに関連する用語」について「森や樹木と人との関わりを表す用語のうち、余暇時間の人間活動に関係しうる用語」と定義し、その定義に従い用語を幅広く抽出した。

3. 結果・考察

(1) 編集方針の比較・整理

対象とした3冊の専門辞典の編集方針を比較するため、各辞典が編纂に当たって設定した専門分野の比較を行った(表-2)。

その結果、1961年と1971年版では12の専門分野、2001年版では11の専門分野を設けていることが分かった。その中で、森林レクに関連する用語を主に担当しうる専門分野は「林政」、「林業経営」、「経営」、「計画」、「造園」、「環境」の6分野である。そのうち、「林業経営」、「経営」、「計画」の3つはほぼ類似の専門分野である。

ここで特徴的なことは、「造園」が2001年版では専門分野として設定されなくなり、逆に「環境」が新設されたことである。つまり、このことから森林分野において造園空間・技術等に関する関心が弱くなる反面、環境問題と関連したトピックに関心が向き始めていることが見て取れる。

(2) 関連用語の数・類型

次に、3冊の専門辞典の「和文索引」を用いて、どのような関連用語が辞典で取りあげられているのかを分析した。

その結果、森林レクに関連する用語は、1961年版で130語、1971年版では97語、2001年版では363語が取りあげられていることが明らかになった。なお、掲載数としては1971年版が最も少なく2001年版が最も多かったが、1971年版は掲載用語自体が少ない。そのため、全掲載用語数と森林レクに関連する用語との比率を比較してみると、1961年と1971年版ではほぼ同値(1.26%)で、2001年版で倍以上増加(2.91%)したことが明らかになった(表

表-2 3つの専門辞典の専門分野比較

林業百科事典 1961年	新版 林業百科事典 1971年	森林・林業百科事典 2001年
1 林政	1 林政	1 林政
2 林業経営	2 経営	2 森林調査 3 林業
3 森林立地 4 造園	3 森林立地 4 造園	4 青林
5 森林保護	5 森林保護	5 森林生物 6 防災
6 防災	6 防災	7 森林利用
7 伐木運材	7 伐木運材	8 林産物利用 9 森林植物
8 木材加工 9 林産化学 10 特殊林産	8 木材加工 9 林産化学 10 特殊林産	10 環境 11 国際林業
11 森林植物	11 森林植物	
12 林業	12 林業	

横方向のハッチングによる区分けは類似の専門分野を示す
「木デイトリック」は森林レク関連用語が主に扱われる専門分野

表-3 各辞典の全掲載用語数とレク関連用語数

事典名	発行年	全掲載用語数(A)	森林レクに関連する用語数(B)	B/A(%)
林業百科事典	1961	10299	130	1.26
新版 林業百科事典	1971	7681	97	1.26
森林・林業百科事典	2001	12495	363	2.91

ー 3)。

さらに、掲載された用語の意味・内容を吟味し、12のカテゴリーに分類した上で、3冊の辞典すべての和文索引に掲載されていた用語をピックアップすると、わずか28語に過ぎないことが明らかになった。28語のうちでは、ほぼ4分の1ずつの比率を占める「環境保全」用語(8語)と、「自然公園」用語(7語)、「五感・アメニティ」用語

表-4 3冊の辞典すべて掲載された用語(28語)

造園・庭園	造園 庭園 剪定(せん定)	自然公園	自然公園 国立公園 特別地域 特別保護地区 イエローストーン国立公園 国立公園 自然公園法
環境保全	環境 自然保護 自然保護運動 国際自然保護連合 緑の週間 緑地 保安林 天然記念物 特別天然記念物	五感・アメニティ	景観 風致 風景 風致保安林 風致林 日本の三大美林
名所・公園	都市公園	学習・教育	学校林
		レクリエーション	レクリエーション

(6語)が突出していた(表-4)。

続いて分類された12のカテゴリーごとに掲載された用語数の推移を年代別にとりまとめた結果、「環境保全」、「五感・アメニティ」、「学習・教育」、「観光」、「レクリエーション」、「NPO・ボランティア」、「世界遺産」、「ナショナルトラスト」など、多くのカテゴリーの掲載用語が軒並

表-5 カテゴリーごとの掲載用語の増減

NO	カテゴリー	用語数			主な用語
		林業百科事典 1961年	新版 林業百科事典 1971年	森林・林業百科事典 2001年	
1	造園・庭園 (百分比)	46 100	25 54.3	16 34.8	造園・造園樹木・剪定・園芸品種・ツツジ類の造園・イタリ ア式庭園・バルコニー庭園・石灯籠・回遊式庭園・枯山 水・建仁寺垣・現代庭園・住宅庭園・前庭 など
2	環境保全 (百分比)	24 100.0	26 108.3	142 591.7	環境・自然保護・愛鳥週間・愛林日・アースデー・緑の週 間・ウィルダネス法・カーソン・環境モニタリング・環境白 書・巨樹巨木・グリーンミニマム・緑地協定・合意形成・森 林と生活に関する世論調査・天然記念物・風致地区 など
3	名所・公園 (百分比)	17 100.0	10 58.8	4 23.5	都市公園・公園制度・都市公園法・公園墓地・児童遊園・ 植物園・日比谷公園・国民公園・松島・遊園地 など
4	自然公園 (百分比)	14 100.0	12 85.7	20 142.9	自然公園・国立公園・国立公園法・都道府県立自然公園・自然 公園法・国立公園協会・国民休暇村・海中公園・特別地 域・特別保護地区・普通地域・イエローストーン国立公園 など
5	五感・アメ ニティ (百分比)	13 100.0	10 76.9	46 353.8	アメニティ・ディスプレイ・観賞のアメニティ・景観・自然 風景地・視覚・テクスチャー・ピクチャレスク・日景賞 風景・風致・風致保安林・森林美学・日本の三大美林・星 山のアメニティ・心理学的尺度構成法 など
6	学習・教育 (百分比)	6 100.0	6 100.0	34 566.7	環境教育・インタープリター・自然観察指導員・自然解説 活動・自然観察路・ユネスコ・ネイチャーゲーム・ネイ チャーセンター・自然観察の森・学校林・森林インストラク ター・山村留学・林業普及指導事業 など
7	観光 (百分比)	4 100.0	4 100.0	20 500.0	観光事業・総合保養地帯・国民宿舎・旅行費用法・エコツ アー・エコユニアム・グリーンツーリズム・温泉 など
8	風習・文化 (百分比)	4 100.0	1 25.0	4 100.0	門松・鷹狩り・茶の湯用木炭・クリスマスツリー・森林文 化・日本山水論・日本風景論
9	レクリエー ション (百分比)	2 100.0	2 100.0	51 2550.0	レクリエーション・レクリエーション活動・レジャー・ウイーン の森・森林浴・探検会・保健休養機能・(レクリエーション の)自然資源・運路のある自然地域(米田園有林の)・森林 の総合利用・森林空間利用・森林療法・遊歩道 など
10	NPO・ボラ ンティア (百分比)	0 -	0 -	19 ∞	環境NGO・車の祖運動・住民参加・女性の参加・地球市 民・阿蘇グリーンストック・車列十字軍・森林クラブ・青年 海外協力隊・参加型森林管理 など
11	世界遺産 (百分比)	0 -	0 -	5 ∞	世界遺産・世界遺産条約・自然遺産・世界自然遺産・文 化遺産
12	ナショナル トラスト (百分比)	0 -	0 -	3 ∞	ナショナルトラスト・ナショナルトラスト協会・ナショナルトラ スト法

*斜体文字の項目は、40年の間に掲載用語が半分以上減少したもの
*網掛けの項目は、40年の間に掲載用語が2倍以上増加したもの

み増加する中、1961年版では上位を占めていた「造園・庭園」、「名所・公園」に関する用語の掲載が著しく減少したことが明らかになった(表-5)。最後に、表-5のデータを用いて、各年ごとにカテゴリー別の構成比をとりまとめたところ、1961年から2001年にかけて「造園・庭園」と「名所・公園」が大きく落ち込み、「環境保全」と「レク」のカテゴリーが著しく増加したことが明らかとなった(図1~図3)。

4. まとめ

以上、1961年から2001年の間に、森林分野の専門辞典において、レクに関する関連用語は全般的に増加したものの、その構成を詳細に検討すると、掲載カテゴリーが「造園・庭

園」や「名所・公園」から「環境保全」へと大きくシフトしたことが明らかになった。

その理由としては、編集方針により「造園」の専門分野が消えて「環境」が新設されたという側面が大きい。しかし、「造園」、「庭園」、「剪定」、「都市公園」などの用語が2001年版の辞典でも継続して掲載されていることから判断すると、「造園・庭園」や「名所・公園」の分野が森林学の対象から完全に外された訳ではない。むしろ対象ではあるが関心が向けられなくなったと見るほうが妥当だろう。

世の中のシステムが多様化したため、森林レクに関する関連用語が森林分野の専門辞典の中で増加することは必然であろう。ただし、上記のように関心が向けられなくなる分野がある事実については留意を払う必要がある。「造園・庭園」あるいは「名所・公園」というレク空間は現在も厳然として重要な野外レク空間であり、森林や樹木はその主要な構成要素となっている。従って、都市からウィルダネスまでの幅広い国土空間における森林管理を一貫して行うためには、「造園・庭園」や「名所・公園」と森林学との関係を再検討することが必要になると考えられる。

【引用文献】(1)日本林業技術協会(1961)林業百科事典, 丸善, 東京, 1086pp (2)日本林業技術協会(1971)新版林業百科事典, 丸善, 東京, 1168pp (3)日本林業技術協会(2001)森林・林業百科事典, 丸善, 東京, 1236pp (4)田中伸彦(2007-1)明治期から1960年代にかけての日本の観光レクリエーションに関わる施策の動向, 林業経済60(4), 1-16 (5)田中伸彦(2007-2)専門辞典の記述に見る「森林レクリエーション」の定義・解釈の変遷, レジャー・レクリエーション研究59, 64-67 (6)田中伸彦(2008)戦後から1970年代までに着手されたわが国林学における観光レクリエーション研究, 日本森林学会誌90(4), 267-282

【註記】日本語には、「事物に関する知識を集めて配列し、項目ごとに解説した書物」という意味の「事典」と、「言葉を集めて配列し、意味や用法などを解説した書物」という意味の「辞典」があるが、本論では、固有名以外はすべて「辞典」と表記に統一した。

